

新潟・中倉遺跡 なかくら

- 1 所在地 新潟県北蒲原郡中条町中倉
- 2 調査期間 第三次調査 一九九七年(平9)五月～七月
- 3 発掘機関 中条町教育委員会
- 4 調査担当者 水澤幸一
- 5 遺跡の種類 集落跡・河道跡
- 6 遺跡の年代 八世紀～九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(中条)

中倉遺跡は中条町の築地地区にあり、砂丘列の内側の潟に面して立地している。今回は、集落のほぼ東限と考えられる自然流路を調査した。これは、前々年度の確認調査で当時の遺跡の範囲外にその存在が確認されたもので、調査時は水田となっていた。その折には、小面積にもかかわらず多量の須恵器・土師器とともに、箸状木製品や馬形などが出土し、祭祀に関連す

る遺跡であることが知られた。また、須恵器の中には「王」「原」「牧人」などの墨書を有するものがあつた。

本調査地点は、自然河川の一部であり、川岸(東)には一基の浅い落ち込みの外に遺構はなく、生活の痕跡は認められない。川は、砂丘列に沿って南西方向に流れており、その下層の黒色粘質土に遺物が含まれている。南半分特に遺物が集中して出土し、須恵器・土師器・土鍾・製塩土器などの土器類の外、盤・曲物・御膳・斎串・付木などの大量の木製品が含まれている。遺物の多くは川の斜面より出土し、遺構のない東側から投棄されたと考えられる。土器類は、遺存率の高いものが多く、墨書土器(須恵器杯が主体で、土師器は一点のみ)は、二〇点程認められた。「王」「丁」が多く、「原」「牧人」は二、三点、「譯」(異体字、土師器碗)は一点のみである。また「王」の刻書須恵器も数点出土している。

木簡は、四点出土した。

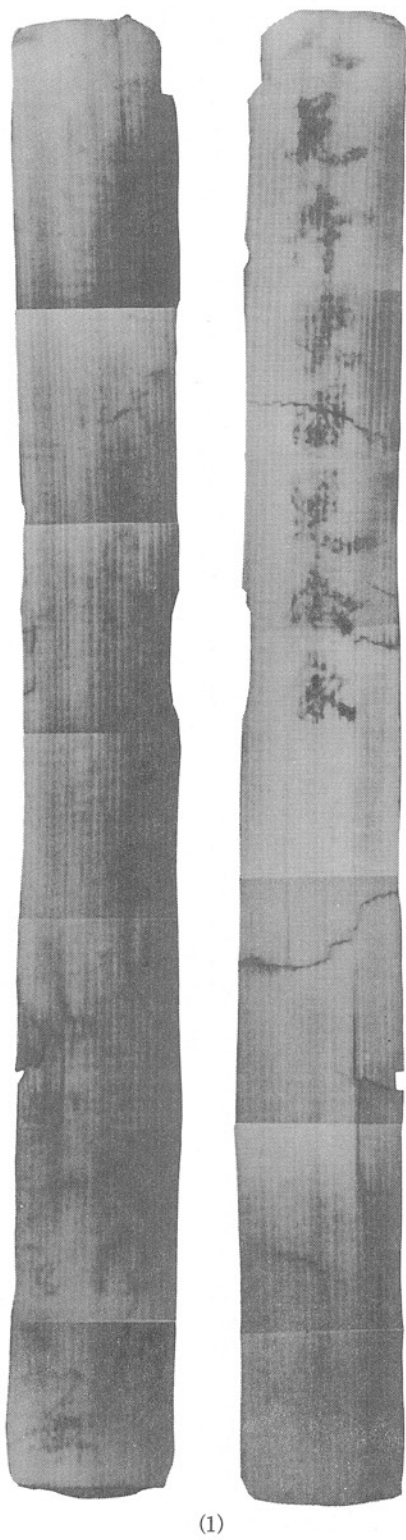
(1)は、遺物集中地点よりやや離れた川上(北方)の岸近くから、裏面が上になった状態で出土した。そのため裏面の上半は墨痕が薄くなつてしまっている。

他の三点は、出土状況が不詳で、整理中での確認である。

なお、遺跡の本体は、今回の調査地の西方に広がる砂丘地上と考えられ、来年度にはその一部の発掘調査を予定しており、遺跡の性格の一端が明らかになることを期待したい。

8
木簡の釈文・内容

- [illegible]



(1)は、完形の木簡。厚さ約一―三ミリで、全体として比較的薄い。表面は「^{〔黍カ〕}飯」にかかわる内容。国足宛の飯を人足らが受けたという意か。裏面は墨痕不鮮明で内容不詳であるが、女性の人名らしき文言など数文字が判読し得る。なお、黍飯の古代における用例としては、『延喜式』の陰陽寮式・大学寮式・雜式に、庭火・平野竈神祭や中央・地方の積奠の供物の一つとしてみえている。

(2)は、上下が欠損し、右端は割れている。記載様式は、人名と数量の列記と思われる。類似の例としては、秋田城跡出土の第一八号木簡（『秋田城出土文字資料集Ⅱ』。本誌未報告）などがある。

(3)は、上下及び右端を欠損している。多くの文字の字画の一部が確認できるが、墨痕が薄く、詳細は不明である。

(4)は、右端が割れ、左端は二次的加工と考えられる。下部に二文字の墨痕が認められるが、詳細は不明である。

なお、木簡の釈読と内容は国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

9 関係文献

中条町教育委員会『下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』（中条町埋蔵文化財調査報告九 一九九六年）

（水澤幸一）

木簡研究 第一四号

巻頭言

一九九一年出土の木簡

八木 充

概要 平城宮跡 平城京左京二条二坊坊間路西側溝 平城京東市跡
推定地 唐招提寺 藤原京跡 飛鳥池遺跡 四条遺跡 長岡京跡(1)
長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 遠所遺跡 木津川河床遺跡 大坂城跡
住友銅吹所跡 桑津遺跡 竜華寺跡 高槻城跡 堺環濠都市遺跡
屏風遺跡 長田神社境内遺跡 宅原遺跡 袴狭遺跡(1) 袴狭遺跡(2)
(旧坪井遺跡) 光明寺遺跡 西河原森ノ内遺跡 西河原遺跡 湯ノ
部遺跡 石川糸里遺跡 内匠日向周地遺跡 小茶円遺跡 富沢遺跡
多賀城跡 円福寺遺跡 田道町遺跡C地点 上荒屋遺跡 山田郷内
遺跡 稻城遺跡 吉野口(鯉山小)遺跡 三門市遺跡 長登銅山跡
空港跡地遺跡(第3工区) 雀居遺跡 興善町遺跡
一九七七年以前出土の木簡(一四)
平城宮跡(第五〇・五一・五二・六三次) 上田部遺跡 郡家今城
遺跡 郡家川西遺跡 じょうべのま遺跡 高瀬遺跡
考古資料としての古代木簡
八幡林遺跡等新潟県出土の木簡
木上と片岡
下級国司の任用と交通―二条大路木簡を手がかりに―
「敦煌漢簡」研究の現状と課題
山 中 章
小 林 昌二
岩 本 次郎
鈴 木 景二
吉 村 昌之

頒価 四五〇〇円 千六〇〇円